
ミレニアムエンパイア ~ 真の千年帝国を目指して ~

狐蔵左京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミレニアムエンパイア ～真の千年帝国を目指して～

【Nコード】

N6078U

【作者名】

狐蔵左京

【あらすじ】

宇宙統一歴939年ドクツ第三帝国により火蓋を切られた第二次宇宙大戦。

ドクツと同盟した日本から1個艦隊を引き連れ軍事支援の名目で送りだされた寺岡竜馬少佐は第三帝国總統のレーティア・アドルフと共にその数奇な運命に翻弄されながらも自らの持つ特殊な力と多くの国の人達と何故お前がここにいると問いたくなるような者達と共に大戦と、そして世界の裏にうごめく大きな闇に立ち向かっていく！

ジーク・ハイル！ハイル・ハイル・アドルフ！ジーク・ハイル・ハイル・ヴィクトー
リア！

プロローグ（前書き）

この作品は何度も何度も周回プレイを重ねているアリスソフトの大作「大帝国」における『アルティメット・アイドルルート』がどうにも気に食わない為に・・・というかヒムラーが好きになれない為にオリジナル主人公を軸に自分なりにドクツルートを書こうと考えたものです。

読んでいただき楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ

IFルートON

ドクツ救済ルートON

日本帝国初期戦力チート状態ON

ゲームをスタートしますか？ はい/いいえ

はい

無限に広がる大宇宙。

その宇宙世界の内に点在するいくつもの星域。

そこには多くの国があり人々が暮らしてきた。

人々は発展を続け世界大戦を経験し、栄枯盛衰を繰り返してきた。

そして現在、世界は再び戦火に包まれようとしていた。

世界を資本の力で支配しようとするガメリカ共和国

全ての物を全人類が共有することで世界を統一しようとする人類統

合組織ソビエト

混乱する世界を自国が支配管理する世界管理プランを議決したエイ

リス帝国

そして、世界最高の天才が一次大戦よりの復興と報復、そして究極の天才による完璧な千年王国の創造を謳いこの戦争の火蓋を切ったドクツ第三帝国。

これはそんな戦争の時代を生きた1人の海軍軍人の物語。

統一宇宙歴939年 月 日

日本帝国・主星日本

「ふむ」

この日、日本帝国海軍長官東郷毅は世界戦略図と現在の海軍提督の名簿をにらみながら唸っていた。

現在日本帝国は開戦初期の大敗を覆し圧倒的な侵攻速度をもって1カ月という短期間で隣国であった中帝国を撃破しさらに不平等条約を大量に突きつけてきたガメリカ共和国・エイリス帝国・オフランヌ王国に宣戦を布告、即座にガメリカ領の2つの星域へ奇襲作戦を実行し勝利を収めた。

現在の日本は、日本・北京・南京モン・アバオウ重慶・マニラ2000・マイクロナシアの6つの星域を有する国家へと成長していた。その快進撃の原動力となったのは何処からともなく表れていつの間にか日本軍の提督になっていた謎のアストロアニマルズ（パンダ・猫・手長猿・コーギー）と東郷が年齢や階級に拘らず海軍の士官の内からどんどん提督に抜擢していった事とドクツ・イタリンとの3国同盟を結び有能な提督と潜水艦艦隊と膨大な技術力を提供されたこと。

そして日本の帝が「大変な時期なんですから、惜しんではいけません」と言つて御所の倉に納めていた緊急用の資源を大量解放してくれたことにより日本軍は一気に戦力を取り戻し現在の状況となつたのだつた。

さて、では何故快調に戦いを進めている日本の長官である東郷が悩んでいるかという話は今朝の御前会議までさかのぼる。

「ねえ、東郷。私は思ったんですけど」

「はい？」

会議の終わり頃この国の国主である紫色の和服を着た幼さの残る少

女、帝が思い出したように言いだした。

「ドクツには技術や艦隊を貸してもらったりしているのに我が国からはほんのわずかな資源をわたしたただけじゃ悪いと思うんです。だから、こちらからも艦隊を貸すことはできませんか？」

「艦隊をですか？」

「おお！それは良い考えですな帝、きつとアドルフちゃ・・・げふ、げふ、もといドクツ総統殿もお喜びになることでしょう」

賛同するように言ったのは禿げ頭に大きな×の字傷にW型の髭が特徴の外務長官宇垣さくらである。

「いや、しかし今は戦力は多ければ多いほどよいという時期だ。何も向こうが現状ことさら困っていないのなら出向させる必要もないのではないか」

反論したのは薄茶色の陸軍制服を着た黒髪の女性陸軍長官山下利古里であった。

「東郷はどう思いますか？」

御前会議の場では帝の意向により多数決で物事を決めるようにしている。

「そうですね・・・賛成です。ここは両国の関係をより強固なものとする為に艦隊を支援として派遣する事にしましょう」

「はい、では3対1でドクツ・イタリン方面に艦隊を派遣することに決まりました」

「とは言ったものの。誰を送るか」

現在の主力である田中や南雲達は動かせないし強いからと言ってまさか動物たちを送るわけにもいかない。

「おや、東郷長官まだ考えていたのですか？珍しい」

そう言っただけで近づいてきたのは白い海軍制服をきつちりと着た東郷の参謀秋山敬一郎だった。

「珍しいとはなんだ失礼な俺だって悩むことくらいある」

「はいはい、主には女性関係のことでしょうが。それはともかくド

クツ派遣艦隊の提督ですか？」

「ああ、これという人材がいなくてな大原提督や金杉提督には荷が重いだろうな」

「東郷長官、ではこの間登用した寺岡少佐の艦隊はどうでしょう。」

マイクロナシアでの活躍はすでに有名ですし若手の中でも期待できるかと思われませんが」

「寺岡竜馬少佐か」

寺岡というのは中帝国との戦争の後半で海軍の人材不足を埋めるために東郷が士官名簿を見ていたとき偶然目に留まった男だった、その経歴と変わった戦術の使い方が気になった為に角田忍太郎・有馬兎子と共に提督に抜擢した。

アバオワではそこそこの働きを見せ、マイクロナシア奇襲作戦ではたった1個艦隊で敵司令官の居る戦域を完封勝利して見せたことから名を上げている。

「ふむ、良いかもしれんな。そうしよう」

「ではそのように手配しておきます」

こうして日本帝国からドクツ第三帝国へ寺岡竜馬提督の艦隊が派遣されることとなった。

派遣艦隊

ドクツ領・主星ベルリン

「で、その日本の提督は今日到着するんだな」

そう聞いたのはキラキラと光る金髪に碧眼やや幼さが残るものの端正な顔の小柄な少女ドクツ第三帝国総統兼アイドルのレーティア・アドルフだった。

彼女は自分の仕事部屋の執務机の上の大量の書類を驚異的な速度で片づけていた。

「ええ、そうらしいは」

答えるのはストレートの黒髪と女性にしてはそこそこの身長、見事なプロポーション、両眼の下に泣きぼくろを持つ女性。

宣伝相グレシア・ゲツベルスである。

2人が話しているのは今日到着する日本からの派遣艦隊の事であった。

「別にいらぬのになあ、増援なんて」

ぼやくようにレーティアは言った。

実際現在の所ドクツは特に困ってはいない。

ジャイアン星域のポツポ　ランド共和国と北欧星域の北欧連合を相次いで叩き潰し、オフランス王国の本土であるパリ星域を難攻不落と言われた大要塞マジノラインを完全無視し鮮やかに攻め落としたのだから世界が震えあがらないわけがなかった。

現在の所ドクツは領土が隣接しているエイリス帝国と交戦状態であり日夜エイリスの侵攻艦隊を撃破したという報告が次々レーティアの元には送られてきていた。

このまま行けばもう少し準備が整いさえすればエイリス本土のロンドン星域を落とすことも可能であると踏んでいるのだから追加の戦力など今され増えてもという感があるらしい。

「まあ、良いんじゃないもらえるものは貰っておけば使えるような

らそれでよし、駄目なようなら駄目で後方の仕事を回せばいいじゃない」
信頼する腹心の意見を聞いてそれもそうだと思ったのかレーティアは適当に頷いた後再び仕事の波にのまれていった。

ベルリン星域のワープゲートがスパークするように発行すると同時に28隻からなる日本の艦隊がワープアウトした。

「寺岡提督、ワープ完了ベルリン星域に到着しました」
「おう」

副官の小林からの報告を受けた男この艦隊を預かる寺岡竜馬はあまり覇気のない声で答えた。

黒髪の短髪は寝グセなのかややぼさぼさだ。

白の海軍制服は着崩れている。

顔はよく見れば美形の部類に入るだろうが眠そうな、やる気のない様な表情がそれを台無しにしている。

腰には提督の証とも言える日本刀は確かに下げられているが見た目をマシにするオプションにはなっていないかった。

醸し出す雰囲気からしてどこかやる気の無さそうな若い男である。

到底マイクロナシア奇襲作戦の功労者には見えない。

ビービービー

「通信です提督」

「ん、繋いでくれ」

繋がれた通信の向こうには黒い軍服を着たドクツ軍人がいた。

『確認するそちらは日本帝国軍よりの派遣艦隊で間違いないか』

「そうだ、日本海軍提督寺岡竜馬だ、日本より貴国の軍事支援の為に来た」

『確認した、こちらの誘導にそって宇宙港へ向かわれたし』
「了解した」

ベルリン宇宙港

着艦した寺岡はさっそく案内の軍人について第三帝国總統と対面することになった。

「展開早くねえ」

「ぼやくように言った言葉は誰にも聞き入れられず消えた。」

「お前が日本から来た提督か？私が總統のレーティア・アドルフだ」
部屋に入ると執務机に座ったままの少女が挨拶をしてきた。

（なるほど。この子が噂の天才總統殿か・・・）

「ああ、どうもジーク・ハイル。本日付でドクツ第三帝国駐在武官及び派遣艦隊提督に就任しました寺岡竜馬といます。よろしくお願ひします」

寺岡も挨拶を返すがいまいち覇気のない声である。

「ん？どうした提督体調でも悪いのか元気が無い様だが」

「いえいえ、私はいつもこんな感じでして」

苦笑いを浮かべながら言うのと總統閣下の隣に立っていた黒髪の女性がムツとした表情で声をかけてきた。

「失礼、提督宣伝相のゲツベルスです。あつて早々同盟国の国家元首に対してその態度は何事ですか」

「あちゃ、叱られちましたね。ほんとすみません・・・まあ、言われた仕事は日本の恥にならないようしっかりこなさせてもらいますんでよろしくお願ひしますわ」

「っ！だからその物言いを」

「良いよ構わない、ゲツベルス」

相変わらず覇気も気力もない様な寺岡に力チンときたゲツベルスが声を荒げようとしたのをレーティアが止めた。

「でも」

「構わない、日本から送られてきたデータが正しければお前は優秀なんだろう？テラオ力提督」

「まあ、どうやら東郷長官には高く評価して貰っているようですがね」

「マイクロネシアではアメリカに圧勝だったんだろう、すごいじゃないか」

「奇襲作戦でしたし、たまたまですよ」

「ふむ、わかった今日の処は休んでくれていいぞ日本軍用の寮を用意している」

「有難うございます、それじゃ」

と言って去ろうしたがふと何かを思い出したように寺岡は振り返った。

「ん、どうした」

「あゝいえ、宇宙港にあるうちの輸送艦の中にこちらに渡す資源5000があることを思い出しまして」

「ああ、分かったありがたいとくよ」

「では」

そういうと今度こそ寺岡は退出した。

「なんなのよ、あの男あんなふざけた男をよこすだなんて日本ってばドクツの事舐めてんじゃないのっ!!」

どうやら相当寺岡の態度が気に食わなかったらしいゲッベルスは憤懣やるかたなしと地団太を踏んだ。

「まあ、確かに変わったやつだったけどいいんじゃないか何だ面白い奴だったし」

ゲッベルスはレーティアのその評価を聞きあつけにとられた。

「面白い？」

「ああ、私は天才な上に1国の総統だ。だというのにあいつは全く気にしてなかった。アイドルとしての私のファンでもないようだし国と国との間にいるものとして最低限の礼はしていた挨拶もドクツのだったしな。ああいう素の対応をされたのはお前を除けば久しぶりだったから面白いと思っただ」

「そう？何も考えてないだけな気がしたけど」

こうしてレーティアの頭には面白い奴として寺岡竜馬のことがインプットされた。

再び案内役の軍人に連れられながら寺岡はブーツと考え事をして
いた。

（まったく、長官も面倒なことを押しつけてくれたものではな
あ・
・しかしレーティア・アドルフ・・ありやどうみてもワンマン主
義なきがするなあ・・つまりは彼女が潰れればこの国も潰れるか
・
・はあ、めんどくさいなあ・・でも同盟国だし助けてやるかあ）
そんな事を考えながらその日は用意された部屋で眠りについた。

派遣艦隊（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
誤字・脱字など見つけましたら教えて頂けると嬉しいです。

アシカ作戦1〜戦闘開始〜（前書き）

注意・作中ドカーン等の擬音表現を使用していますがあくまで原作にならつての事ですのであまりお気にせずにお読みくださるようお願いいたします。

アシカ作戦1〜戦闘開始〜

ドクツについて4日間寺岡はドクツの軍事施設をまわったり主要な提督たちと会う等して忙しく過ごした。

マンシュタイン元帥等には「なんだそのだらしない格好はッ！貴様それでも軍人かッ！」と活を入れられたりもしたがその次に会ったロンメル元帥は比較的友好的に接してくれた。

それ以外では技術の説明や軍の演習を見学したことによりドクツがの強さや技術面でのレベルの高さが伺え一軍人としては羨ましいやら脅威を感じるやら大変だった。

その間、総統と会う事はなかった。

そして今日寺岡は提督たちの末席として軍議に参加していた。

「本作戦名はアシカ作戦と命名する！」

ドクツによるエイリス本土襲撃作戦の会議が総統自ら陣頭指揮をとるといふ事で多少の問答はあったものの最後は総統の自信にあふれる言葉が反対していたマンシュタイン元帥の胸を打ちそのまま実行されることとなった。

ドクツの作戦に参加するのは初めてとなる為寺岡は特に何も言わずに聞いているだけだったが確かに作戦としては良いものだった。

高速機動艦隊を率いるロンメル元帥が敵陣を叩きつつ陽動も兼ねて敵を引きずり出す、そこをマンシュタイン元帥率いる高火力艦隊が一気に焼き払い序戦でのアドバンテージを握る。

後は数で押してくるであろうエイリスに対してわざと戦闘宙域をこちらから広げていく、エイリスの目的が迎撃である以上相手は必ずこちらを追い掛け向こうも戦域を広げる。

こうなれば相手の数の上での有利は分散していく、すると後は現場の兵、指揮官、兵器のレベルの上で戦闘を行える。

兵のレベルでは確かにドクツはエイリスに錬度で劣るかもしれない

が、それを補える優秀な提督が何人もおりさらには自分たちが信じる総統が直接指揮をとるといふのだから兵たちの士気は高い。そして、兵器という点では宇宙一の天才を有するドクツ艦は現在のエイリスの2、3世代上の艦船を多数そろえているのだ。これだけの条件がそろえば勝機があるというのがレーティアの主張であつた。

「さて、さて、それじゃあまあ戦闘準備ををしますか」
やる気なさげな声を出しながら寺岡は自らの艦隊の旗艦60式主力戦艦改『陸奥』に乗り込んだ。

「提督、ドクツ軍司令部より通信が入っています」
「ん？繋いでくれ」

オペレーターからの報告に寺岡が応じると通信画面の向こうにはアドルフ総統の姿がうつつた。

「おや、これは閣下どうしましたか？」
『いや、今回の戦いで日本の実力の一端を見せてもらえることを期待しているので頑張ってくれと言おうと思つてな』

「あははっ、お言葉痛み入りますね。ですが私の戦い方は堅実を胸にしておりますんでそうそう面白い戦いはお見せできないと思ひますよ」

『そうか？ぜひともマイクロネシアの英雄の実力が見たいと思つていたんだがな・・・まあいい。それではな』

プツン

通信が切れると寺岡は指揮官席に座り体を預けた。

「すごいですね、提督！あのアドルフ総統からあのようなお言葉を賜るとはさすがです」

副官の小林が興奮したような口ぶりですんな事を言うのに対して呆れた感じで寺岡が言った。

「阿呆が、ただの国家間での社交辞令だ。ついでに言うとうちの艦隊は戦力としてはまるで期待なんざされちゃいないんだよ」

「え？」

「今回の戦闘は大きく見れば鋒矢の陣になる」

鋒矢の陣とは に似た矢印型の突撃陣形である。

「うちの配置はエリアB、日本で言う所の第1戦闘域、陣の内側だ。陣の先端で最前線となる第4戦闘域エリアAはロンメル元帥、そんで左翼の第2戦闘域エリアCにはマンシュタイン元帥こちらも確実に激戦区だ。エリアDにも有能な提督たちが配備されるらしい。外様の俺らは一番主戦場から遠いところで敵のはぐれ艦隊やらあえて前線を突破して俺らの後ろで指揮を執る総統閣下に向かってくる奴らの掃討がお仕事になるってわけだ」

「そ、そうなんですか・・・」

がつくりうなだれる小林に苦笑を浮かべて。

「まあ、そう落ち込むなよ。俺らは俺らに出来ることをやるしかないんだしな」

「はい、そうですね提督」

その後ドクツは半月の間作戦の準備に追われた。

その間また帝の指示で今度は同盟国のイタリアン共和帝国に日本から大井あつし大佐率いる艦隊が出向して行ったり、そのイタリアンがエイリスの植民地である北アフリカを占領したりと世界は動き続けた。余談であるが日本もまた東郷長官の指揮によりエイリス領のマレーの虎の占領に成功していた。

そして、ゼーレウエーアシカ作戦は実行された。

ヨーロッパ星海域・ロンドン星域

ドーンッ！

ドガンー！！

ここではすでに20時間にわたり戦闘が繰り返されていた。

エイリスの初期戦力はドクツの三倍を有していたが最新鋭艦とアド

ルフの指揮に隙はなく戦闘宙域を覆わんばかりに展開していたエイリス軍は水に溶ける氷のように数を減らしていき現在では完全に戦闘はドクツ優位に傾きつつあった。

「閣下！エイリス側の損害20%に到達しました」

副官からの報告を聞きレーティアは満足げに頷いた。

「うん、順調だな。マンシュタインとロンメルは今どこにいる？」

「マンシュタイン艦隊エリアC6 侵攻中、ロンメル艦隊エリアA7 突破」

「そっか、うん。マンシュタインはそのまま、ロンメルは調子に乗りすぎないよう伝えろ、今の行動には陽動としても側面もあるとな」

「ヤー」

「あ、そうだエリアBとDはどうなっている？」

「エリアDドクツ艦隊D6 侵攻中。エリアB日本派遣艦隊及びドクツ第三巡用艦隊及び第四戦闘艦隊エリアB5 侵攻中です閣下」

報告を聞いたレーティアは現在の戦況と敵の位置、自軍の位置を素早く頭の中で計算していく。

その間に隣で何やらしながら控えていたゲッベルスが口をはさんだ。

「それって、エリアBはどっちかっていうと侵攻が遅いってこと？」

その質問に副官は。

「いえ、総統閣下の作戦計画との誤差は18分、全体の許容範囲内です」

「それでも遅れすぎじゃない、やっぱり日本軍の艦じゃドクツの艦隊には追いつけないか」

「いえ、それがどちらかというドクツ艦隊に上手く合わせてきているようで・・・それどころかこちらの動きに対してフォローを入れてきており現在エリアBの自軍損害率はわずか8%他戦域よりは戦闘が激しくないとはいえ驚異的な数字かと・・・」

「ええ！なにそれ、あのだらしのない提督の艦隊が実は強かったって言うの」

「はい、私見ではありますが」

(ふうん、本当に堅実な戦い方に徹しているんだなあ)

以前の会話を思い出し周りに気付かれない程度にレーティアは笑った。

一方その頃寺岡は。

ドーン、ドガンツッ！！

敵の4個艦隊を相手に激戦のど真ん中にいた。

「うーん、こりゃ考えが甘かったわなあ・・・」

先に考えたようにエリアBはおそらく直接的な戦場にはならないと思っていたのだがその考えは甘く普通にバンバン敵の迎撃艦隊が押し寄せてくる。

「さすがは世界に冠たるエイリス大帝国。地力が違うか。あ、ほれ敵の巡洋艦が射程に入ったぞ先行駆逐艦打ち方始め！」

「寺岡提督、右舷に回り込まれましたこのままではドクツ第4戦闘艦隊の側面を突かれます！」

「あゝドクツ艦の方に警告のあと巡洋艦秋風、冬風、駆逐艦6から8号急速転進45度ドクツ艦隊のあいだを突っ切って敵艦隊を迎撃せよ、とりあえず脅しになればいい、射程に入る前から打ちまくれ」
「了解」

寺岡はこのように艦隊を艦隊とも思わないと言わんばかりに両翼を固めるドクツ艦の間に自軍の船を紛れ込ませたり、上下の船の間を通ったりという奇抜な戦術をとり闘っていた。

前半こそドクツ側よりむちやくちやくをするなとクレームを言われていたがいつの間にかこの戦術にドクツ側も慣れてきてしまったのかやりたいようにさせてくれるようになってきた。

実際この戦術はドクツに多少の混乱をよんだがそれ以上にエイリス軍を混乱させた。

まず日本国籍の船がドクツ軍に混ざっていることに戸惑い、実際に戦うとやたらと手ごわい、さらに先の様な戦術によりドクツの船を攻撃しようとしたらその影からひょっこり日本の船が現れ攻撃して

くるのでまるで蛇の巣穴をつつくような緊張をエイリス側は受けなければいけないのだった。

「総統閣下、そろそろ指揮権をマンシユタイン元帥にでも渡して休まれてはどうですか？」

開戦から20時間指揮を執り続けたレーティアにゲッベルスが甘い
はちみつ入り紅茶を渡しながら言った。

その紅茶をおいしそうにすすったあとレーティアは軽く考えてから
首を振った。

「いや、いいよ。ここまで来たんだし今更引き継ぐのも面倒くさい
し、もう少しなんだ自分でやるよゲッベルス」

「そうですか、でも無理はしないでくださいね」

心配そうに顔を曇らせるゲッベルスにレーティアは苦笑しつつ大丈
夫だと伝えた。

ビービービー

「ん、通信？イタリンのムッチリーニ総帥から？」

その通信は日本とドクツの同盟国イタリン共和国からのものだった。
た。

通信を繋ぐとそこにはどこか一本ネジの抜けたようなゆるんだ顔、
とても豊満な体を薄赤色の軍服に包んだ赤毛長髪の女性イタリン共
和帝国総帥兼アイドルのムッチリーニ・ベニスが映し出された。

「わー アドルフちゃんだあ、今日も可愛いー」

通信相手はここが戦場であることを忘れてしまいそうなほど甘い声
だった。

(うう、相変わらずこの人はやりにくい・・・)

「あ、あおう、ムッチリーニ総帥、何のご用でしょうか？今日私が
エイリスに侵攻することは事前に伝えておいたはずですが・・・」

「あ、うん、それがねー困ったことになっちゃって。とつてもとつ
てもピンチなの、北アフリカに攻め込んだエイリス軍がとつて
もすごいのだ。もっけっちゃんけちゃんにやられちゃって・・・こ

のままじゃ全滅しちゃうわ〜」

「は？ちよ、ちよつと待つてくれ、確かイタリンは現地のエイリス軍の数倍の戦力を持つていたはずじゃ・・・それに日本からの援軍も・・・」

『うん、だよねえ・・・どうして負けちゃったのかなあ？私にも分かんないのお。とにかくねアドルフちゃん！急いで助けに来てえ、おねがいよお、待つてゐるからね、じゃ！』

「え、あ、ちよつと待つて！ムッチリー・・・」
ブツン

「一二・・・」

「総統閣下、信じがたいことですがイタリンの敗北は事実の様です・・・すでに北アフリカは陥落エイリス軍はイタリンの本拠地大ローマ星域に攻め入り始めていますがイタリンの方は北アフリカから蜘蛛の子の様に逃げてきた艦隊と本国の防衛艦隊が入り乱れて収集の付かない大混乱に陥っているようです・・・このままでは本当にイタリンは占領されます」

「んっ、うっうっうっうっ・・・」

ゲッベルスからの報告にレーティアは頭を抱えた。

（まずい、まずいぞ！？イタリンが落ちればベルリンへの道が開けてしまう！）

イタリンの本拠地大ローマとドクツの本拠地ベルリンはワープゲートで繋がった隣接星域である、もしイタリンが落とされることになればそのまま無防備なベルリン本国を攻め落とされる可能性が出てくる。

（首都は陥落・・・我が軍は挟み撃ち・・・ダメだなムッチリーニを見捨てることはできないか・・・仕方ない！）
意を決しレーティアは命令を下した。

「ロンメル艦隊に連絡！ただちに反転し大ローマへ急行、イタリン軍を救うんだ！」

「ヤー、ロンメル元帥へ伝えます」

その命令にゲッベルスが飛び上がった。

「ちよ、総統！いいんですか？ロンメル元帥なしでこの作戦は・・・

」

そう言ってくるゲッベルスにレーティアはどこか青ざめた自信のなさそうな表情でいった。

「だ、大丈夫だ・・・ここまで勝ってるんだ、なんとか押し切れる・・・はずだ・・・」

それは天才アドルフが今まで決して言う事の無かった確信無き言葉であった。

そして、運命の針は狂いだす。

アシカ作戦1〜戦闘開始〜（後書き）

お読みくださりありがとうございました。

次回は原作になかった戦場を書きたく思います。

アシカ作戦とその頃のイタリアン戦線は

イタリアン領・大ローマ星域

この星域は現在エイリス帝国の誇る最強の指揮官騎士提督の一人ク
ルド・モントゴメリー率いる12個艦隊に攻め込まれすでに戦線
は最終防衛ラインの手前第4防衛線にまで踏み込まれていた。

元はかなりの軍備を持っていたイタリアンだったが現在のムツチリー
ニ総帥が国主になってからというもの面白さ重視の政策を次々打ち
立て国力を低下させていったのだった。

さらに戦場にも潤いをと言って軍に次々容姿端麗でかつ胸の大きな
女性たちに黒いビキニを着せて入隊させていったのだ。

これらは黒ビキニ党と呼ばれた、さて問題はここからだこのビキニ
美女たち1部の士官として扱うなら良かったのだが何を間違えたの
か、あるいはトチ狂ったのか彼女たちのほとんどは提督職について
しまったのだ、戦闘経験は愚かほとんどの者は士官学校にさえ行っ
ていないというのである。

そんな軍で世界の4分の1を支配するエイリス帝国軍に勝てる訳が
無かった。

『しかし、ずいぶんとあっけなく終わりそうですね、モントゴメ
リー卿』

通信の向こうで精悍な男、エイリスのアフリカ方面駐留艦隊提督コ
ンパスがどこかおどけた感じでいった。

「うむ、だが油断は禁物だ。なにせ相手はまだまだ数だけはいいるの
だからね」

そう答えるは壮年の男性。

緑色のエイリス軍服の両肩部に十字架の意匠された肩鎧を付けた立
派な髭をもつ騎士クルード・モントゴメリーであった。

「現状はどうなっている？」

「はっ！現在敵第4防衛線の戦力損傷率40%に到達。敵の陣は崩壊寸前です」

「そうか」

オペレーターの報告に頷きながらモントゴメリーは思索していた。

（確かにこのまま行けば今日中にはイタリアンを討ち果たせるかもしれない、そうなれば現在のわが国最大の脅威ドクツ第三帝国への道も開けるか）

「よし！このまま一気に敵の陣を食い破り最終防衛線も突破してイタリアンを制圧する！！」

「うおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

気合いを込めた号令に最早勝ちを確信していたエイリス軍の兵たちが内側から船を揺らさんばかりの鬨の声を上げた。

しかし。

ドーン、ドガン

と立て続けにエイリスの先行艦隊が爆発、炎上しながら沈んでいった。

「何っ！？」

さらに1度、2度、3度と爆発が繰り返され先行していた巡洋艦隊と駆逐艦隊の2個艦隊があっという間に全滅したのだ。

「何事だ！報告せよ」

「て、敵防衛艦隊から1個艦隊が突出、その艦隊からの攻撃により前線部隊全滅しました！」

モントゴメリーは驚愕した。

「なんと・・・イタリアンにもまだそのようなツワモノが残っていたのか」

「いえ、これはイタリアン艦ではありません・・・」

「イタリアンではない？では、もしかやドクツかね？」

しかし、モントゴメリーの予想にオペレーターは首を振った。

「いえ、ドクツ艦ではありません。見たことの無い船です」

そういつてブリッジの大モニターに映し出された敵艦隊にモントゴ

メリーは眉をひそめた。

「これは、まさか……」

映し出されたのはまごう事なき船であった。

惑星内の海などで見られるあの船の形をした宇宙戦艦だ。

あのような形の艦はモントゴメリーの記憶の内には1国しか使用されてはいないはずだった。

「識別信号確認、所属は……日本帝国っ！日本軍の艦隊ですっ！」

「やはりそうか」

自分の予測が当たった事自体にはさして感慨もなくモントゴメリーは自慢の髭を軽くしごきながら思索する。

（まさかアジアの小国である日本が同盟国とはいえイタリンへ艦隊を派遣していようとは。ふふ、東洋のサムライの力みせてもらうとするか！）

周囲に目を向けると兵たちには多少の混乱がみられるようだ、今まで出会ったことの無い国の艦隊でありどのくらいの能力を有するのか彼らには分からないからであろう。

モントゴメリーは軽く息を吸い威厳のある声で宣言した。

「慌てるな、たとえ相手がどこの国の艦隊であれ、我ら栄光あるイリス艦隊が恐れるものは何もない！全艦進撃！イタリンの子豚たちとアジアの蛮族を切り伏せよっ！！」

「……お……おおおお！……おおおおおおおおおっ！！！」

モントゴメリーの鼓舞と号令に僅かの混乱から抜けた兵士たちは再び関の声を上げ戦場へ突き進んでいく。

一方、件の日本帝国艦隊は。

「大井提督、奇襲成功しました。敵前衛2艦隊を撃破」

「ああ、良くやってくれた諸君！」

部下の報告に勢いよく頷いたのはイタリン派遣艦隊提督大井あつし。やたらガタイのよい身体をしっかりと白の海軍服に包んだ角刈り頭

の男である。

「しかし、良かったのでしょうか？わざとイタリアンの敗走艦隊を隠れ蓑にしての奇襲なんて・・・」

「うむ、だが残念な事にほとんどの者たちが戦わずして逃げ出してきた弱兵達、せめてもの役に立ってもらわねばな」

部下の心配に大井は苦笑しながら答えた。

「敵艦隊陣形を再編しつつ再度侵攻開始しました」

「さすがに早いな・・・、だがこちらにも負けてはいないぞ！全艦主砲発射！」

号令と共に日本軍の艦隊、50式主力戦艦と駆逐艦、そしてガメリ力軍から獲した凡庸駆逐艦サムナ 級のレーザーが一齐に再編成を急いでいるエイリス軍を襲い宇宙に再び大きな花火を咲かせた。

「別に倒しきる必要はない！ムツチリーニ総帥閣下の話ではもうすぐドクツからの援軍が到着する予定だ！さらにイタリアン軍の再編をユーリ・ユリウス提督が行っている！我が艦隊と第4防衛線はそれまでの間何としてもエイリス軍を釘付けにするのだ！それ、敵が来たぞミサイル巡洋艦全門一斉射放てえい！！日本とムツチリーニ総帥の為にい！」

何やら妙な熱の入り方をした大井の指揮により62式ミサイル巡洋艦4隻から無数のミサイルが発射される。

しかし。

発射されたミサイルは全弾あさつての方角へと飛んで行ってしまふ。

「何っ!?!」

「提督、敵の艦隊の内よりミサイル誘導の妨害電波が発生しています。こちらのミサイルは相手にききません！」

「くっおのれ・・・」

攻撃を畳み掛け反撃の隙を与えないようにしてきたがここで日本軍は完全な隙を見せてしまった。

そして、それを見逃すエイリス軍ではない。

「提督っ！敵艦隊より反撃来ます」

「全艦緊急回避！」

ドーン

ドガン

敵のレーザーを辛くも回避した旗艦。

「被害を報告せよ」

「ミサイル巡洋艦2、50 駆逐艦4、サムナ 級3が撃沈。その他
軽微ながら被害を受けた艦多数」

上手く回避に成功した方だが少なくない被害が出ていた。

「ぬう〜！他の防衛線のイタリアン艦は何をしている！」

最初の奇襲で大きな戦果をあげたとはいえ敵はまだ10 個艦隊はい
るのだとても日本の艦隊だけで太刀打ちはできない。

しかし……。

「て、提督……」

オペレーターの下が青ざめた表情で大井の方を見た。

「ん？どうした」

「イ、イタリアン艦が周囲にいません……」

「なんだと？」

「第四防衛線の艦隊はすべて後退し最終防衛線の強化に入っていま
す……」

大井は驚愕に顔を引きつらせた。

「待てッ！そのような通信は受けてないぞ！」

「どうやら明確な命令から動いた結果ではなく、我が艦隊が敵艦を
引きつけている間に他の防衛線艦隊が我先にと逃げ出したようです・

……」

「なん……だと……」

これは別にイタリアン全てに見捨てられたわけではないと分かっ
ても戦場でいきなり孤立したことは兵士たちにとってかなりの精神
的ダメージとなる。

さらに目の前に迫る敵はエイリスの精鋭部隊その数は単純に10 倍

これだけの条件が整えば精強を自負し、戦場でのメンタル面の強さ
で有名な日本軍もすつかり及び腰になってしまう。

旗艦の艦橋でも兵達が口々に「我々も逃げるべきでは・・・」「畜
生！イタリンの奴ら俺らを見捨てやがって」と不安が広がっていつ
た。

「落ち着け！やかましいぞ諸君！」

さざ波の様に広がり兵達を捉え描けていた不安を大井が一喝入れて
押しとどめる。

「いいか良く聞け諸君！イタリンへの助勢は我々が東郷長官から、
帝からお預かりした我らの使命である！これを完遂せず逃げ出し、
生き恥をさらすような者は栄えある日本帝国海軍軍人ではない！先
ほども言ったはずだ我々は勝つ必要はないのだ、友軍が駆け付ける
までの戦闘を引きのばせば我らの勝ちだ！行くぞ諸君！陣形を整え
る！敵に砲門を向ける！帝の為、我らの為、ムツチリーニ総帥の為
にいゝ！！！」

こうして大井艦隊は手負い状態の1個艦隊のみでイタリンの先頭に
立ちエイリス軍を迎え撃つこととなったのだった。

アシカ作戦と、その頃のイタリン戦線は、(後書き)

原作では描かれなかったイタリンの闘いを考えて書きました。
いかがだったでしょうか？

次はロンドン戦に戻ります。

アシカ作戦3〜敗走〜

エイリス領・ロンドン星域

ドガン

ドドドーン

イタリン救出の為にロンメル元帥が主力艦隊の3分の1を率いて戦場を離脱してからわずか1時間、戦場の天秤は大きくその傾きを変えていた。

エイリス軍・前線指揮艦 騎士艦トラファルガー

「やはり、ドクツ軍の一部がイタリンへ向かったようですね」

「そうですね、では、今こそが反撃のチャンスですね」

艦橋で通信映像越しに話をしている男女は意を決したようにうなずき合った。

片方は緑色のエイリス軍服に十字架の意匠された肩鎧という騎士提督服を着た青みがかった黒の長髪に柔和そうな顔立ちの男、騎士提督兼本土防衛艦隊司令ジョン・ロレンス。

もう一人はゆつたりとした金髪のロングヘアに強い意志の感じられる美貌、緑と白のドレスを着た女性、しかし彼女の体は所々から出血しているらしく包帯が巻かれておりさらに点滴まで受けていた。

兵達と共に戦場で戦うエイリスの騎士女王セーラ・ブリテン。

「では、陛下これより本格的な反撃に移ります」

「お願いします、ロレンス」

そして、古き王者たる獅子は新生し襲い来る鷲へと牙をむいた。

レーティアは焦っていた。

「あ、コラそこは違うと言っているだろうがっ！そのままじゃC3に来て敵への対応が間に合わないだろうが！」

「総統閣下、エリアA6にて第2戦闘艦隊全滅しました！」

「なんだとお！」

部下の報告に彼女は悲鳴じみた声を上げた。

予想異常にロンメルを含めた主力艦隊3/1が抜けた穴は大きく、絶対の布陣を誇っていたドクツ艦隊は大きく混乱することになった。

「まだ、まだだ！マンシュタイン艦隊をC8へ、ケツテンクラート艦隊はA2へ急げ」

それでもまだレーティアには勝利へ至る為の方程式が頭の中にあっただが。

「閣下っ！エリアD4にてブラウナー艦隊、シュミット艦隊敵艦隊に包囲され覆滅されました！ゲルリッツ艦隊は半数以上の艦を犠牲に脱出、こちらに向けて逃走中です」

「なっ！？そちらの方面にはそんなに敵がないんじゃないのか！」

「・・・申し訳・・・ありません・・・閣下」

「くっ！」

レーティアの計画は一気に大量の戦力が抜けたことによる兵達の不安から生まれた士気の低下、そして有能な前線指揮官、後方からの総統の命令を前線にいきわたらせる現場の指導者が圧倒的に不足していたがための命令伝達の鈍さにより次々に潰されていった。

唯一レーティアの望む動きができたのはマンシュタイン艦隊と、そして。

「エリアB7日本艦隊及びドクツ2個艦隊敵艦隊を撃破！今だ全艦隊損傷率27%・・・すごい」

「何事だ？・・・なんだこれは・・・」

「・・・なんなのよ、このマイペースさは」

オペレーターの報告を受けてモニターを覗きこんだレーティアとゲツベルスは呆然となった。

他の戦線が大混乱に陥っている中寺岡の艦隊はじわじわとエイリスの戦力を削り侵攻を続けていた。

のだった。

「この機を逃してはいけません！あとは各個撃破するのみ、敵1艦隊に対し3倍の戦力で包囲、殲滅するのです」

「うおおおおおおお！」「」

雄叫びと共にエイリスの大艦隊が押し出していった。

事実上ここに勝敗は決した。

いかにドクツの天才レーティア・アドルフが作り上げた高性能艦とはいえ所詮は道具、使うもの達が不安や恐怖から動けなくなれば、後はただただエイリスの物量の前に蹂躪されるのみ……。

次々と船を沈められ、防戦一方になったドクツに残された選択肢は撤退しか残されてはいなかった。

本来であれば防衛線に勝利したことでエイリスも矛を引くところであつたが……。

『ロレンス騎士提督。提案なのですが』

あるエイリスの上級貴族出身の提督の進言が戦場に新たな展開を呼んだ。

ドーン！

ドドドーンッ！

ほんのわずかな間静寂を取り戻していた宇宙に再び爆音が轟いた。それを自分の艦隊の旗艦艦橋にて聞いた寺岡は隣に控えていた副官の小林に問いかける。

「おいおい、何事だ？戦闘は終了だろうに」

寺岡の相変わらずの覇気のない声にこちらはおおいにあせった様子の小林が答える。

「提督っ！落ち着いてる場合じゃないですよ！エイリス軍が追撃し

としつかりと準備をし計画を練り上げイタリン方面にも気を付けていればこんなことにはならなかった」

あまりにも大きな敗戦の衝撃に打ちのめされた2人の主従は僅かに沈黙する。

『閣下、このままでは全滅する可能性もあり得ます……。ここは私が殿しんがりに残り何としても持ちこたえて見せます、その間に閣下はパリ星域までいかれ防衛線を。マジノラインを使えばそうそう、エイリスも攻めきれませんでしょう』

マジノラインとは少し前までパリを本拠地としていたオフランス王国が作り上げた星域を囲うように配置された防衛要塞群であり、かつては世界最高の防衛力と謳われていたがドクツの潜水艦Uボート艦隊による奇襲によりほぼ無傷で現在はドクツに使われている。

「待て！お前が居なくなればドクツの力は今度また立ち直るのにとんでもなく時間を食ってしまう！そうならばもう後はじり貧だ！」

『しかし、この状況……。他の提督たちでは抑えきれません』

「……っ！」

マンシュタインの悲壮な決意を固めた表情にレーティアは言葉を返せなくなってしまった。

と、そこに。

『あの〜お取り込み中すいません』

通信に覇気のない寺岡の声が割り込んできた。

通常の艦は1対1の映像通信しかできないが指揮艦であるレーティアの艦は最大4人までの映像通信ができるようにされていた。

「寺岡提督？」

『貴様っ！今は重要な話の最中だぞ！』

辛い話をしてきた2人は突然割り込んできた同盟国の男に片や戸惑い、片や怒声を浴びせた。

『はい、それは承知してはるんですがね。総統閣下に1つお願いがあります』

鍛え上げられた軍人でも震えあがると言われた、マンシュタインの

怒気を通信越しとはいえ受けたというのに寺岡はさして動じるでもなくひょうひょうとそんなことを言った。

『貴様!』

「いい、マンシュタイン。それで、どうしたんだ提督?」

再び激昂しかけたマンシュタインを制しレーティアは聞いた。

彼女としてはこの絶望的状况の中少しでも気分を変えたかったのだ。

そして寺岡の発した言葉はその気分は愚か度肝すらブチ抜いた。

『うちの艦隊に殿しんがりさせてください』

そう彼は覇気の無いながら明るい口調で言い切った。

「……」

「……」

『……』

「『はあ!?!』」

これには気分が沈みこみかけていたレーティアだけでなく悲壮な覚悟を決め特攻を覚悟していたマンシュタイン、黙って話を聞いていたゲッベルスすら驚愕の声を上げてしまっていた。

『何を言うのだこの痴れ者があ!?!』

「そ、そうだ……お前の艦隊だけでこの状況がどうにかなるわけではないだ、ろつが……」

マンシュタインは寺岡を含めた同盟国日本がまだ信じ切れていないし、さらに自分のお株を奪われたのだ堅物な昔気質の軍人である彼が怒こらないわけがない。

片や、レーティアの方は普段冷静で頭の回転も良いというのに今は自責の念と敗北の絶望と恐怖により普段の勢いはない。

そんな二人と通信しつつ寺岡は不敵に笑って見せた。

『いや、それですがね、一応勝算があるんですよ。だから任せてくださいよ』

「勝算?」

『ええ、詳細は明かせませんがね』

「・・・」

勝算、その言葉がレーティアの頭と心に引っかかった。

『貴様、まさかエイリスに寝返るつもりではなからうな』

マンシユタインのドスのきいた詰問が飛んだ。

しかし、寺岡はひるむどころか飄々と答えた。

『まさか、エイリスは私の祖国日本にとっても敵ですよ？』

『むう・・・』

映像の向こうの寺岡をマンシユタインは探る様に睨みつけていたが彼には何も分からなかった。

「分かった・・・寺岡艦隊に殿を命ずる」

『閣下・・・』

「いい、なにも言うなマンシユタイン。提督本当に大丈夫なんだろうな？」

『はい、今後ドクツには1隻すら被害を出させないことをお約束しましょう』

「ふ、頼もしいじゃないか。存分にやって見せる！」

『ヤブオー了解しましたメインヒューライ総統閣下』

ブツン

ドクツ式の敬礼の後寺岡からの通信は切れた。

『閣下よろしいのですか？』

心配顔のマンシユタインが問う。

「仕方ないんだ・・・今お前を失うわけにはいかない。もし本当に寺岡提督にこの場を切り抜けることのできる策があるというのなら私はそれに賭けるしかない」

『そのお言葉だけでも嬉しく思います』

ロンドン会戦の戦局に新たな幕が上がるうとしていた・・・。

アシカ作戦3 敗走 (後書き)

読んでくださりありがとうございました。

ご意見・ご感想など書いていただければ嬉しいです。

次回はやっとのことで主人公無双となります。

アシカ作戦4〜龍の目〜（前書き）

めちゃくちゃ間が空いてしまったですね。

しかも長っ！

一部突貫だったので読みにくい、分かりにくい等ありましたら遠慮なく言ってやってください。

では、どうぞ。

アシカ作戦4〜龍の目〜

ロンドン星域

ドクツ派遣艦隊旗艦 60式主力戦艦改『陸奥』 艦橋

「提督、全艦方向転換完了。これよりエイリス軍へ向けて進行します」

「ああ」

副官小林の報告を聞き寺岡は頷いた。

「小林、全艦に通信をこれより戦闘を開始、龍の目を開く」

「了解」

そういうと小林は通信機を操作し自軍の全艦に通信を掛けた。

「我が艦隊はこれより同盟国ドクツへの軍事支援としてエイリス軍と交戦に入る。作戦プランは龍の目。繰り返す作戦プランは龍の目」この通信に各艦から了解の返事が入る。

『こちら櫻木、巡洋艦隊了解』

『武神駆逐艦隊了解！』

『藤井特雷隊、分かりました』

『遊佐特雷隊りようかい、お願いしますよ大将』

それらの声を聞き、寺岡は頼もしいと言わんばかりにニヤリと笑い次の指示を出す。

「小林、次はあちらさんに通信を頼む」

エイリス軍 騎士艦トラファルガー 艦橋

「ロレンス提督、逃走中の敵艦隊から1個艦隊がこちらに向かってきます」

部下の報告に騎士提督ジョン・ロレンスは眉をひそめる。

（この状況で殿が1個艦隊だけということとはそれだけの実力者を出してきたという事でしょうね。おそらくはマンシュタイン元帥の艦

隊、油断していると足元をすくわれかねませんね)

「敵艦隊の状態、編成はどうなっていますか」

戦術を考える為に聞いた質問には意外な答えが帰ってきた。

「はい、敵艦隊はドクツ軍に紛れていた日本軍の艦隊です。特に損傷などは見られません」

「は？」

これは予想外だったロレンスはつい間の抜けた声を出してしまった。(日本軍？何故ここで日本軍の艦隊が出てくるのだ。これも天才レィティア・アドルフの考えた何かの作戦？)

何せ日本軍の艦隊はドクツの様に数世代先の新鋭艦ではないのだ、今の日本の技術革新は目覚ましいものがあると報告は受けているが単純な艦の性能でいえばおそらく現状ではエイリスの物に一步劣る。そしてエイリスの追撃部隊は前衛に8個艦隊、それに続く形で17個艦隊さらにその後ろに指揮を行うロレンス艦隊を含め6個艦隊の計31個艦隊である。

これに対して日本軍だけが殿として攻めてこようというのだ。

例えどれだけ有能な提督が指揮にあたっているとしても捨て石にもならないだろうことは自明であった。

「とにかく、一当てしてから様子を見ましようか。前衛のパーシバル提督に通信を・・・」

ビービービー

「ロレンス提督、日本艦隊より本艦に通信が来ています」

「日本軍から？分かりました繋いでください」

通信兵は頷き映像通信を繋いだ。

そこには白い軍服を着崩したどこかやる気の無さを感じる男が映っていた。

ドクツ軍 痛戦艦アドルフ号 艦橋

「マンシュタイン元帥、日本軍がエイリス軍に通信を繋ぎました」

「うむ」

映像の向こうではどうやらロレンスが副官に窘められているようだった。

「あははっ、どうやらロレンス卿は愉快な方の様だ」

『ゴホン、侮辱なら許しませんよ』

まさか乗っってくれるとは寺岡も思っていなかったもので、ついつい笑みがこぼれ相手はそれを恥ずかしそうにしながらも、侮辱と受け取ったのか不機嫌そうだ。

「失礼。まあ、冗談はこれくらいにして本題ですが、エイリス軍はこれかもドクツ軍を追撃されるのでしょうか、それはやめた方が良いでしょう」

やはりからかわれたのかと表情をしかめたロレンスだったが相手の微妙な言い回しに疑問を感じた。

『やめた方が良い？やめるではなくですか？』

「そうですね」

覇気もなければやる気もないと言った感じの声で答える寺岡にロレンスは問う。

『どういう事ですか？』

相手が食い付いたことに内心笑みを浮かべながらも寺岡はおどけて見せる。

「さあ」

『……』

騎士艦トラファルガー 艦橋

（何なのでしょうね、この提督は。一見ただやる気の無いだけに見えますがそれだけとはとても思えませんね）

ロレンスは寺岡のやる気の無さを完全に自信の表れだと履き違えていた。

『で？ロレンス卿返答やいかに？』

映像の向こうの男は相変わらず無気力な表情でこちらを見ている。
（考えても仕方ありませんね！）

「そのような事を言われたからと言って、はいそうですかと引きさ
がれるとお思いですか？ 答えは否！ エイリス軍はドクツ軍を追撃し
ます」

『それが、死地に自ら踏み込むことになっても？』

「くどい！ どのような障害も我らの剣で切りはらって見せます！」
毅然と言い切るロレンスの姿に周囲のエイリス兵が喝采を送った。

『はあくご立派、仕方ないですね・・・では、ロレンス卿最後に一
言だけ。私どもの求めるものはエイリスが我らを追わず逃がしてく
れることです、このことはお忘れなきよう』
ブツン

（彼はいつたいなにが良かったのだろうか）

日本軍 戦艦陸奥 艦橋

「やっぱだめか」

「当たり前だと思えますよ」

通信を切ってばやく上官に小林は肩を落とした。

「提督、敵主砲の射程距離まであと5分です」

「了解、小林例の物は装填しているな？」

「はい、抜かりはありません」

「なら、重畳」

有能な副官の仕事ぶりに満足げにうなずいた後寺岡は軽く深呼吸を
した後腰に差していた軍刀を抜き放ち号令を發した。

「戦闘開始！ 八方睥睨龍はっほうへいげいりゅうの陣で敵軍に突入する！ 突入前、特殊弾発
射を忘れるなよ！」

そこには最早やる気のなさそうなだれた男はおらず、日本軍の艦隊
提督どころか若いながら一軍の将と言われれば誰もが納得してしま
いそうな覇気溢れる精悍な男が立っていた。

そして両軍は互いの主砲の射程に入った。

敵の前衛艦隊を指揮していたのはマレーの虎星域にかつて駐留して

いたエイリス軍アジア方面司令提督パーシバルであった。

「日本軍っ！ははは、ここで会ったのも神の導きよ叩きつぶしてくれ！」

彼はマレーの虎会戦のおり日本軍を完全に舐めて掛かり東郷率いる艦隊にあっさり敗北して本国に逃げ帰ってきたという過去があるだけに日本軍への恨みは深い。

「パーシバル提督、敵艦隊我が軍のレーザー射程に入りました」

「よし、一撃で決めてやれ、全門目標標準でえい！」

その瞬間エイリス軍のカメラモニターは閃光に塗りつぶされた。

「な、何事だ！」

「日本軍がこちらに向けて閃光弾を発射したようです」

「閃光弾？ふ、はは、悪あがきを何をトチ狂ったことを。構わん、レーザー探知で攻撃を行え！」

「アイアイサー、主砲発射！」

ズギューン！

「どうだ当たったか？」

閃光弾によりカメラ映像を一度切った艦橋の中でパーシバルは確認しながらも勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。

何せ敵一個艦隊に対して自分の艦を含め4個艦隊が一斉に主砲を放ったのだ壊滅は必定に思われた。

「こ、これは……」

しかし、オペレーターの間から出たのは戸惑いの声だった。

「ん？どうした？」

「提督、レーザー機器が正常に稼働しません！」

「何イ！」

「おそらく敵は閃光弾の後にジャマ を使用したようです！信じられない……まだ、エイリスでも実験段階。ガメリカでもようやく最近実戦配備が始まったばかりの物を日本軍が……」

戸惑う部下をパーシバルは怒鳴りつけて落ち着かせてからカメラ映像に切り替え状況を確認するように命じた。

そして艦橋のモニタに映像が映された。

そこには何も映っていなかった。

「ふははは、全滅か！やはり日本軍如き我ら誇り高きエイリスの敵ではないのだ！」

高笑いを上げながら勝利宣言をする自分達の指揮官の姿に艦内では歓声が上がった。

あえて言うならば、この時のエイリス軍は間抜けだったと言わざるを得ない。

彼らは戦場の興奮と日本軍への恨みにより目を曇らせ本来ならば気付くべき映像の中にあるべきものが無いことに気付かなかった。

次の瞬間。

ドガアアアアアアアアアアアアン！

パーシバルの乗る戦艦キングジョー？世級は強烈な振動に揺れた。

「な、なんだあ！」

と、そこに通信が入った。

『パーシバル提督何をしているのです！上です！』

そう言って通信を掛けてきたのはロレンスだった。

日本のジャマーは今の今まで通信妨害の効果も発揮していたのだった。

「うえ？」

ロレンスの叱責に慌てて索敵担当の士官が艦の上方を捉えられる力メラの映像をモニターに映した。

「な・・・何だあれはっ！」

そこには甲板を下にいるエイリス軍に向けるようにひっくり返った状態でこちらに砲門を向ける日本艦隊の姿があった。

エイリス軍、というよりはこの戦場にいるすべての艦船とは上下逆の状態の日本艦隊である、その距離およそ700m一般の戦闘ならば鉄鋼弾の射程であった。

そして、その砲門の中に光が生まれていた。

「了解、全艦重力制御装置及び姿勢制御装置解除そのまま。総員衝撃に備えよ！3・2・1 旗艦最大戦速開始！」

日本軍の艦隊のエンジンが火を噴き目を疑うような動きを見せた。

「なっ！」

「バカな……」

「うそ……」

急加速した日本軍の船はその形状からは想像できないようなしなやかな動きで艦首を下方のエイリス軍へ向けると獲物を捕らえる水鳥の如く突貫しエイリス軍の内に入り込んだ。

そして……ロンドンの宙そらに無数の花火が散った。

騎士艦トラファルガー 艦橋

次々と入ってくる報告にロレンスはかつてない程その表情をひきつらせていた。

「第4 巡用艦隊全艦機関大破！行動不能！」

「第1 2 駆逐艦隊潰走、第6 戦闘艦隊旗艦・艦橋中破操艦不能！」

「旗艦を失った第1 7 艦隊より指示を求むとのことです！」

（一当てしてから判断しよう？……甘かった……とんだジョーカーだ……ドクツ、いや、日本にこんなむちゃくちゃな提督がいようとは……）

現在トラファルガーの艦橋モニターには20 個近い艦隊の中を自由自在に飛び回り当たるを幸いにレーザーと鉄鋼弾をぶちまけては周囲にいたエイリス艦に火を上げさせる戦艦が1 隻、巡洋艦4 隻、駆逐艦10 隻、特雷型駆逐艦10 隻、たった一個艦隊で20 倍の戦力を手玉に取った日本軍がそこにいた。

寺岡は抜き身の軍刀を持ったまま次々と指示を飛ばしていた。

「『秋風』と駆逐6号はそのまま前進、特雷2号・3号はその位置から鉄鋼弾を5秒後発射！」

『了解！3・2・1、発射！』

2号・3号から放たれた鉄鋼弾は護衛巡洋艦工ドガー級の左右両舷から襲い爆沈させる。

「次、駆逐3号60m前進後上角46度に全砲斉射！続き『春風』

『夏風』も主砲発射！」

放たれるレーザーと鉄鋼弾が敵陣中に花を咲かせていくのを感じながら寺岡は次々と指示を飛ばす。

ある時は先のように攻撃を支持し、そして敵の攻撃を受けそうな時は・・・

「『秋風』狙われてるぞ！右舷後方よりの攻撃、即時機関最大船速それで避けれる。つと、今度はこの陸奥か、前方敵戦艦2隻からの砲撃来るぞ！左舷側、横転し回避せよ！」

横転回避、戦艦に向かって転がって避けるという無茶苦茶な支持、普通ならこんな命令をする指揮官は気が狂っていると思われる。

しかし。

- ころん

そんな擬音が聞こえてきそうなほど緩やかにしかし、高速に陸奥は左側に転がった。

そしてレーザーをそんな方法で避けられ呆然とする敵戦艦に陸奥の主砲はぶち込まれる。

会戦からこつちずつとこれの繰り返しである、寺岡軍の攻撃は一方的に当たり、エイリスの攻撃は的確に、時には先のように奇抜な方法で回避される。

場合によっては回避ついでに同士討ちさせるなどという事までする、これがかなり相手に精神的ダメージを与えおそれと攻撃もできなくなるエイリス軍を確実に叩いて行く。

その頃、ロンドン星域 第2惑星イングランド軌道上

「マリー様、全艦隊出撃用意完了しました」

「OK、全艦隊出撃！なんだか手を焼いてるロレンスを助けに行くよお！」

そう言っつて艦隊の指揮を執ったのは、緑色のエイリス軍制服に白のスカート、美しい金髪はショートに、瞳は好奇心の強そうなクリクリとした青、目を引くのは豊かに実った女性の象徴をもつエイリス女王セーらの実の妹本国艦隊提督マリー・ブリテンであった。

混迷を極めるロンドン会戦の終わりが近づきつつあった……。

アシカ作戦4〜龍の目〜（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6078u/>

ミレニアムエンパイア ~ 真の千年帝国を目指して ~

2011年10月13日21時25分発行